「広告の裏の献立とあの日の約束」

鈴々乃らん　（60 代）

冷蔵庫には五人分の夕食が、ぎっしり並んでいた。

扉の前には、広告の裏に書き残した献立と器の配置。

ある日は、鮭の塩焼き、ほうれん草のおひたし、ナスの味噌汁。

献立の隅には、いつも「おかえり」と書いた。

「どんなに貧しくても、子どもたちをお腹いっぱいにする」

五人の子どもを抱えてシングルマザーになった二十七年前、それは、誰にも言わず、胸の奥でそっと決めた『約束』だった。

軽い決意ではなかった。生きるため、子どもたちを守るための、私自身の覚悟だった。

不安で押しつぶされそうな日もあった。

給料日前の冷蔵庫を開けて、ため息を飲み込んだ日もあった。

それでも子どもたちの賑やかな声は、どんな苦しさも溶かしてくれた。

朝起きて、夕食の支度まで一気に済ませる。

作った料理を一人分ずつ盛りつけ、冷蔵庫に詰め込む。

大皿にすると、好きなものばかり食べてしまうから――。

そんな理由も、いつしかわが家の当たり前になった。

子どもたちは、広告の裏に書いた献立を見ながら、温める皿を選んでいた。

「えっと……これとこれと」

「おねえちゃん！これでええの？」

長女は、小さなお母さんだった。私の代わりに、下の兄弟の面倒をよく見てくれた。

疲れて帰り、冷蔵庫を開けて空っぽになっているのを見ると、私はそっと胸をなでおろした。

「今日も、みんな食べてくれたんだ」と。

広告の裏の献立は、私がそばにいない時間のために残した、ささやかなラブレターだった。

わが家で特別な日といえば、子どもたちが何より楽しみにしていた「ちらし寿司と茶碗蒸し」。

誕生日や運動会、合格発表――『いいこと』があった日のごちそうだ。

ちらし寿司の具材は、一つひとつ別々に炊いた。茶碗蒸しは一度に二十個から三十個。器が足りず、マグカップや湯呑まで総動員した。

蒸し器の蓋を開けるたび、白い湯気が台所にふわっと広がった。

「一人何個？」

「今日は五個だよ」

「晩ごはんに三個、残りは朝食べようっと」

湯気の向こうで、みんなが笑っていた。その笑い声が、その日を生きている実感になった。

気づけば、あの約束から二十七年。振り返れば、あっという間だった気がする。

今、子どもたちはそれぞれに家庭を持ち、巣立っていった。

「美味しい！」

その声を聞けるのは、年に数回になった。

孫たちがちらし寿司を食べながら言う。

「ねえ！これ、ママが好きなやつだよね」

その言葉に、胸の奥がじんわり温かくなる。送り続けたラブレターは、形を変えて戻ってきた。

今日も、私は台所に立つ。湯気の向こうに、あの頃の子どもたちが笑っている気がする。